

4課

教会における罪

7月25日

安息日午後

7月18日

暗証聖句

あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい。(Iコリント 6:19、20、口語訳)

知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。(Iコリント 6:19、20、新共同訳)

今週の聖句

Iコリント 5:1～13、IIコリント 2:5～10、Iコリント 6:1～13、
Iテサロニケ 4:1～8、Iコリント 6:19～7:9

今週のテーマ

私たちの脳はスポンジのようなものです。感覚を通して入って来たものは、何でも脳の中にとどまります。私たちは、入って来たもののほとんどを意識していないかもしれませんが、それらはすべて脳に残っており、私たちが考え、感じ、行動することに、ある程度の影響を及ぼしています。

だからこそ、クリスチャンである私たちでさえ、周囲のあらゆる悪いことに影響されやすいのです。キリスト教会は、初期の頃からこの問題と戦ってきました。例えば、日曜順守はどこから来たのでしょうか。教会が突然思いついたのでしょうか。もちろん違います。周囲の文化から生まれたのです。

この原則は、コリントの教会でも見られます。パウロは、派閥争いに反対を訴えたあと(Iコリ1～4章)、性的不道德、訴訟、売春、結婚、独身に関する問題(同5～7章)に目を向けます。世の基準が彼らに大きな影響を与えていました。Iコリント1～4章で描かれた派閥争いは、続く章で非難される道徳的行動への扉を開きました。教会におけるこの罪に、パウロはいかに対処したのでしょうか。そこから、私たちはどのような教訓を得られるのでしょうか。

25

※ I コリ 1～7 章はお手持ちの聖書をお読みください。

キリスト教の歴史を通じて、神学者、牧師、信徒たちは、教会のあるべき姿を見定めるために新約聖書を研究してきました。例えば、私たちは使徒言行録(使徒行伝)の教会の姿に驚嘆します。しかしその一方で、重要な一つの要素を容易に見失ってしまいます。それは、人間には問題があるということです。私たちは新約聖書を、教会のあるべきではない姿を知るためにも読むことができますのです。パウロがコリントの信徒へ送った手紙は、良い出発点となるでしょう。

問1 Iコリント 5:1～13 を読んでください。パウロはこの箇所で、どんな恥ずべき状況を描いていますか。なぜそれは心をかき乱すことなのでしょう。

「父の妻」(Iコリ 5:1)という表現は、パウロが1人の男性とその継母との近親相姦関係に言及していることを示唆しています。この状況は、おそらく「クロエの家の人たち」[口語訳「クロエの家の者たち」](同 1:11)によって報告されたのでしょうか。近親相姦は、「異邦人の間でも許されない」(同 5:1、英訳 ESV “not tolerated even among pagans”)ほど、ひどい罪とされていました。しかし、それが今、初期のキリスト教会でも起こっているというのでしょうか。Iコリント5:1、2におけるパウロの言葉は、教会員がこのようなことをしているという報告に、彼が衝撃を受けたことを示しています。

しかし、この悪い状況はそれだけにとどまりません。パウロは、コリントの信徒たちがこの状況を嘆くどころか、その罪を容認している自分たちを誇ってさえいることを知り、さらに愕然とします(同 5:1、2)。それゆえ、彼は不道德な男だけでなく、信仰と行いの間に明らかな不一致がある教会をも正そうとします。実際、パウロは、近親相姦を犯した男に対する教会の寛容な態度が正されなければならないと繰り返し述べています。しかし、そのような性的スキャンダルを誇り、自慢さえしている(同 5:2、6、英訳 NIV “proud” 誇る、“boasting” 自慢する)とは、いったいどういうことなのでしょう。それは、パウロにとって耐え難いことでした。これらの人々は、いったいどうしてしまったのでしょうか。

なぜコリントの教会が近親相姦の男にこれほど寛容だったのか、私たちには説明できません。もしかしたら彼は、教会に利益を与える裕福な信徒だったのかもしれませんが。あるいは、「すべてのことが許されている」[口語訳「すべてのことは、わたしに許されている」](同 6:12)という理由で、彼らはこの行為を、本来判断すべきようには判断しなかったのかもしれませんが。実際のところ、私たちにはわかりません。

真の理由が何であれ、彼らは聖書の明白な違反(レビ 18:7、8)に目をつぶってしまったのです。しかも、それを誇りにしていたというのです。

【参考】英語テキストにある文

What things are clearly condemned in Scripture that we, as a church, are in danger of tolerating, all in the name of “love” and “acceptance”?

聖書の中で明確に非難されている事柄のうち、教会として私たちが「愛」や「受容」の名の下に容認してしまう危険性のあるものは何でしょうか。

26

I コリ 5:1～13 (新共同訳)

5:1 現に聞くとところによると、あなたがたの間にみだらな行いがあり、しかもそれは、異邦人の間にもないほどのみだらな行いで、ある人が父の妻をわがものとしてしているとのことです。

5:2 それにもかかわらず、あなたがたは高ぶっているのか。むしろ悲しんで、こんなことをする者を自分たちの間から除外すべきではなかったのですか。

5:3 わたしは体では離れていても霊ではそこにいて、現に居合わせた者のように、そんなことをした者を既に裁いてしまっています。

5:4 つまり、わたしたちの主イエスの名により、わたしたちの主イエスの力をもって、あなたがたとわたしの霊が集まり、
5:5 このような者を、その肉が滅ぼされるようにサタンに引き渡したのです。それは主の日に彼の霊が救われるためです。

5:6 あなたがたが誇っているのは、よくない。わずかなパン種が練り粉全体を膨らませることを、知らないのですか。

5:7 いつも新しい練り粉のままでいられるように、古いパン種をきれいに取り除きなさい。現に、あなたがたはパン種の入っていない者なのです。キリストが、わたしたちの過越の小羊として屠られたからです。

5:8 だから、古いパン種や悪意と邪惡のパン種を用いないで、パン種の入っていない、純粋で真実のパンで過越祭を祝おうではありませんか。

5:9 わたしは以前手紙で、みだらな者と交際してはいけないと書きましたが、

5:10 その意味は、この世のみだらな者とか強欲な者、また、人の物を奪う者や偶像を礼拝する者たちと一切つきあってはならない、ということではありません。

I コリ 5:1～13 (口語訳)

5:1 現に聞くとところによると、あなたがたの間に不品行な者があり、しかもその不品行は、異邦人の間にもないほどのもので、ある人がその父の妻と一緒に住んでいるということである。

5:2 それなのに、なお、あなたがたは高ぶっている。むしろ、そんな行いをしている者が、あなたがたの中から除かれねばならないことを思って、悲しむべきではないか。

5:3 しかし、わたし自身としては、からだは離れていても、霊では一緒にいて、その場にいる者のように、そんな行いをした者を、すでにさばいてしまっている。

5:4 すなわち、主イエスの名によって、あなたがたもわたしの霊と共に、わたしたちの主イエスの権威のもとに集まって、
5:5 彼の肉が滅ぼされても、その霊が主のさばきの日に救われるように、彼をサタンに引き渡してしまったのである。

5:6 あなたがたが誇っているのは、よろしくない。あなたがたは、少しのパン種が粉のかたまり全体をふくらませることを、知らないのか。

5:7 新しい粉のかたまりになるために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたは、事実パン種のない者なのだから。わたしたちの過越の小羊であるキリストは、すでにほふられたのだ。

5:8 ゆえに、わたしたちは、古いパン種や、また悪意と邪惡とのパン種を用いずに、パン種のはいつていない純粋で真実なパンをもって、祭をしようではないか。

5:9 わたしは前の手紙で、不品行な者たちと交際してはいけないと書いたが、

5:10 それは、この世の不品行な者、貪欲な者、略奪をする者、偶像礼拝をする者などと全然交際してはいけないと、言ったのではない。もしそうだとしたら、あ

もし、そうだとしたら、あなたがたは世の中から出て行かねばならないでしょう。

5:11 わたしが書いたのは、兄弟と呼ばれる人で、みだらな者、強欲な者、偶像を礼拝する者、人を悪く言う者、酒におぼれる者、人の物を奪う者がいれば、つきあうな、そのような人とは一緒に食事もするな、ということだったのです。

5:12 外部の人々を裁くことは、わたしの務めでしょうか。内部の人々をこそ、あなたがたは裁くべきではありませんか。

5:13 外部の人々は神がお裁きになります。「あなたがたの中から悪い者を除き去りなさい。」

I コリ 1:11 (新共同訳)

1:11 わたしの兄弟たち、実はあなたがたの間に争いがあると、クロエの家の人たちから知らされました。

I コリ 6:12 (新共同訳)

6:12 「わたしには、すべてのことが許されている。」しかし、すべてのことが益になるわけではない。「わたしには、すべてのことが許されている。」しかし、わたしは何事にも支配されはしない。

レビ 18:7、8 (新共同訳)

18:7 母を犯し、父を辱めてはならない。彼女はあなたの実母である。彼女を犯してはならない。

18:8 父の妻を犯してはならない。父を辱めることだからである。

あなたがたはこの世から出て行かねばならないことになる。

5:11 しかし、わたしが実際に書いたのは、兄弟と呼ばれる人で、不品行な者、貪欲な者、偶像礼拝をする者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪をする者があれば、そんな人と交際をしてはいけない、食事を共にしてもいけない、ということであつた。

5:12 外の人たちをさばくのは、わたしのすることであろうか。あなたがたのさばくべき者は、内の人たちではないか。外の人たちは、神がさばくのである。

5:13 その悪人を、あなたがたの中から除いてしまいなさい。

I コリ 1:11 (口語訳)

1:11 わたしの兄弟たち、実はあなたがたの間に争いがあると、クロエの家の人たちから知らされました。

I コリ 6:12 (口語訳)

6:12 すべてのことは、わたしに許されている。しかし、すべてのことが益になるわけではない。すべてのことは、わたしに許されている。しかし、わたしは何ものにも支配されることはない。

レビ 18:7、8 (口語訳)

18:7 あなたの母を犯してはならない。それはあなたの父をはずかしめることだからである。彼女はあなたの母であるから、これを犯してはならない。

18:8 あなたの父の妻を犯してはならない。それはあなたの父をはずかしめることだからである。

月曜日 7月20日 スキャンダルへの対処

性的な問題への対処は、常に困難なものです。パウロにとっても同様であり、私たちにとっても同じです。このような状況において、私たちは聖書に忠実であり、祈りと愛をもって問題に取り組まなければなりません。私たちの目標が回復であることを、決して忘れてはなりません。

問2 I コリント 5:1～13 を読み直してください。この状況にどう対処しなさいと、パウロは言っていますか。

I コリント5章でパウロは、性的なスキャンダルには教会の懲戒が必要であると明言しています。近親相姦を犯した男は除外され(I コリ 5:2)、裁かれ(同 5:3)、サタンに引き渡され(同 5:5)、「除き去る」(同 5:13)べきであると、彼は述べています。教会員は、そのような人と「交際してはいけない」(同 5:9、11)、「そのような人とは一緒に食事もあるな」〔口語訳「食事を共にしてもいけない」〕(同 5:11)と言われました。パウロは強い言い回しを用いており、現代人の耳には不快に聞こえるかもしれませんが、彼の言葉は歴史的な文脈の中で理解される必要があります。また、彼がここで扱っているのは、甚だしく罪深い生き方であることを忘れてはなりません。通常、こうした極端な状況では、強い言い回しが必要なのです。いずれにせよ、いくつかの表現については簡単な説明が役立つでしょう。

「こんなことをする者を自分たちの間から除外すべき」〔口語訳「そんな行いをしている者が、あなたがたの中から除かれねばならない」〕(I コリ 5:2、5:13 も参照)。これは教会の懲戒を指しています。

「このような者を……サタンに引き渡し(なさい)」〔口語訳「彼をサタンに引き渡し(なさい)」〕(I コリ 5:5)。このような人は、神に従う生活を送ることで神の保護を受けることを選ばなかったため、サタンの攻撃を受けやすかったのです。ですから、この表現は、「自分の決断の結果を刈り取りなさい」といったことを意味しているにすぎません。

「そのような人とは一緒に食事もあるな」〔口語訳「そんな人と……食事を共にしてもいけない」〕(同 5:11)、「交際してはいけない」(I コリ 5:9、11)。性的に不道德な人と親しく交わることは、彼らがほかの人に影響を与え、彼らの行いを真似させるかもしれないので、危険であると考えられていました。古代において、食事を共にすることは、価値観を共有することをも意味しました。私たちはみな、周囲の影響を受けやすいので、特にこのようなことに対処する際には、できる限り自分自身を守る必要があります。

「彼の霊が救われるためです」〔口語訳「その霊が……救われるように」〕(I コリ 5:5)。教会の懲戒は更生を目的としています。罪人を正気に戻し、罪深い生き方を捨てさせることを意図しているのです。〔【参考】ここに英語テキストでは文があります: This is possibly what Paul meant by “destruction of the flesh” (1 Cor. 5:5). 「おそらく、これがパウロが「肉の滅び」(I コリ 5:5)と言った意味なのであろう〕 I コリント5章に登場する近親相姦の男は、のちに言及される悔い改めた人物である可能性もあります(II コリ 2:5～10 参照)。〔【参考】英語テキストにある続きの文: Church discipline reaches its purpose when the erring member is reintegrated into church fellowship. 教会の懲戒は、過ちを犯したメンバーが教会の交わりに再び受け入れられたときに、その目的を果たすことになります。〕

27

I コリ 5:1～13 (新共同訳)

5:1 現に聞くところによると、あなたがたの間にみだらな行いがあり、しかもそれは、異邦人の間にもないほどのみだらな行いで、ある人が父の妻をわがものとしていたということです。

5:2 それにもかかわらず、あなたがたは高ぶっているのか。むしろ悲しんで、こんなことをする者を自分たちの間から除

I コリ 5:1～13 (口語訳)

5:1 現に聞くところによると、あなたがたの間に不品行な者があり、しかもその不品行は、異邦人の間にもないほどのもので、ある人がその父の妻と一緒に住んでいるということである。

5:2 それなのに、なお、あなたがたは高ぶっている。むしろ、そんな行いをしている者が、あなたがたの中から除かれねば

外すべきではなかったのですか。

5:3 わたしは体では離れていても霊ではそこにいて、現に居合わせた者のように、そんなことをした者を既に裁いてしまっています。

5:4 つまり、わたしたちの主イエスの名により、わたしたちの主イエスの力をもって、あなたがたとわたしの霊が集まり、

5:5 このような者を、その肉が滅ぼされるようにサタンに引き渡したのです。それは主の日に彼の霊が救われるためです。

5:6 あなたがたが誇っているのは、よくない。わずかなパン種が練り粉全体を膨らませることを、知らないのですか。

5:7 いつも新しい練り粉のままでいられるように、古いパン種をきれいに取り除きなさい。現に、あなたがたはパン種の入っていない者なのです。キリストが、わたしたちの過越の小羊として屠られたからです。

5:8 だから、古いパン種や悪意と邪惡のパン種を用いなくて、パン種の入っていない、純粋で真実のパンで過越祭を祝おうではありませんか。

5:9 わたしは以前手紙で、みだらな者と交際してはいけないと書きましたが、

5:10 その意味は、この世のみだらな者とか強欲な者、また、人の物を奪う者や偶像を礼拝する者たちと一切つきあってはならない、ということではありません。もし、そうだとしたら、あなたがたは世の中から出て行かねばならないでしょう。

5:11 わたしが書いたのは、兄弟と呼ばれる人で、みだらな者、強欲な者、偶像を礼拝する者、人を悪く言う者、酒におぼれる者、人の物を奪う者がいれば、つきあうな、そのような人とは一緒に食事もするな、ということだったのです。

5:12 外部の人々を裁くことは、わたしの務めでしょうか。内部の人々をこそ、あなたがたは裁くべきではありませんか。

5:13 外部の人々は神がお裁きになりま

ならないことを思って、悲しむべきではないか。

5:3 しかし、わたし自身としては、からだは離れていても、霊では一緒にいて、その場にいる者のように、そんな行いをした者を、すでにさばいてしまっている。

5:4 すなわち、主イエスの名によって、あなたがたもわたしの霊も共に、わたしたちの主イエスの權威のもとに集まって、

5:5 彼の肉が滅ぼされても、その霊が主のさばきの日に救われるように、彼をサタンに引き渡してしまったのである。

5:6 あなたがたが誇っているのは、よろしくない。あなたがたは、少しのパン種が粉のかたまり全体をふくらませることを、知らないのか。

5:7 新しい粉のかたまりになるために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたは、事実パン種のない者なのだから。わたしたちの過越の小羊であるキリストは、すでにほふられたのだ。

5:8 ゆえに、わたしたちは、古いパン種や、また悪意と邪惡とのパン種を用いずに、パン種のはいつていない純粋で真実なパンをもって、祭をしようではないか。

5:9 わたしは前の手紙で、不品行な者たちと交際してはいけないと書いたが、

5:10 それは、この世の不品行な者、貪欲な者、略奪をする者、偶像礼拝をする者などと全然交際してはいけないと、言ったのではない。もしそうだとしたら、あなたがたはこの世から出て行かねばならないことになる。

5:11 しかし、わたしが実際に書いたのは、兄弟と呼ばれる人で、不品行な者、貪欲な者、偶像礼拝をする者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪をする者があれば、そんな人と交際をしてはいけない、食事を共にしてもいけない、ということであった。

5:12 外の人たちをさばくのは、わたしのすることであろうか。あなたがたのさばくべき者は、内の人たちではないか。外の人たちは、神がさばくのである。

5:13 その悪人を、あなたがたの中から除

す。「あなたがたの中から悪い者を除き去りなさい。」

Ⅱコリ 2:5～10 （新共同訳）

2:5 悲しみの原因となった人がいれば、その人はわたしを悲しませたのではなく、大げさな表現は控えますが、あなたがたすべてをある程度悲しませたのです。

2:6 その人には、多数の者から受けたあの罰で十分です。

2:7 むしろ、あなたがたは、その人が悲しみに打ちのめされてしまわないように、赦して、力づけるべきです。

2:8 そこで、ぜひともその人を愛するようになしてください。

2:9 わたしが前に手紙を書いたのも、あなたがたが万事について従順であるかどうかを試すためでした。

2:10 あなたがたが何かのことで赦す相手は、わたしも赦します。わたしが何かのことで人を赦したとすれば、それは、キリストの前であなたがたのために赦したのです。

いてしまいなさい。

Ⅱコリ 2:5～10 （口語訳）

2:5 しかし、もしだれかが人を悲しませたとすれば、それはわたしを悲しませたのではなく、控え目に言うが、ある程度、あなたがた一同を悲しませたのである。

2:6 その人にとっては、多数の者から受けたあの処罰でもう十分なだから、

2:7 あなたがたはむしろ彼をゆるし、また慰めてやるべきである。そうしないと、その人はますます深い悲しみに沈むかも知れない。

2:8 そこでわたしは、彼に対して愛を示すように、あなたがたに勧める。

2:9 わたしが書きおくれたのも、あなたがたがすべての事について従順であるかどうかを、ためすためにほかになかった。

2:10 もしあなたがたが、何かのことにについて人をゆるすなら、わたしもまたゆるそう。そして、もしわたしが何かのことでゆるしたとすれば、それは、あなたがたのためにキリストのみまえでゆるしたのである。

火曜日 7月21日 教会の存在意義を守る

I コリント6:1～11でパウロは、教会内の人々に関わる問題にクリスチャンがいかに対処すべきかについて、さらに論じています。

問3 I コリント 5:3、12、13、6:1～13を読んでください。パウロはコリントの信徒や私たちに、どんなことを教えようとしているのでしょうか。

I コリント6:1の「プラグマ」というギリシア語は、「事物、問題」を意味する一般的な用語で、聖書では「争い」と訳されています。ここでは、法的問題を指しています。覚えておくべき大切なことは、I コリント6:1～11が言及しているのは刑事事件でないという点です。刑事事件に関しては、世俗の裁判所の権威がローマ13:1～5で認められています。パウロは、モーセが申命記22:22～24で行ったように、性的不道徳の問題の直後に訴訟権利の事例を取り上げています。これは、教会における問題へのパウロの対処法が、いかに聖書に基づいているかを示しています。

I コリント6:1～11の事例が、性的不道徳を扱った箇所(I コリント5章と6:12～20)で挟まれているという事実は、I コリント6:1の「争い」も性的不道徳に関するものであることを示唆している可能性があります。この事件が財産争いのような些細な民事問題なのか、それとも性的問題なのか、定かではありません。

結局、「プラグマ(争い)」がどんなものであったにせよ、パウロは、教会員がそれを世の裁判所に持ち込んだことを快く思っていないでした。彼らは、クリスチャンの兄弟姉妹として、この問題を「正しくない人々」〔口語訳「**正しくない者**」〕(I コリ6:1)の前に持ち込むのではなく、自分たちで解決できなかったのでしょうか。

また、ある人たちが推測しているように、I コリント6:1の訴訟当事者は、同5:1の父親と息子である可能性もあります。いずれにせよ、要点を理解するために、その問題を〔細部まで〕理解する必要はありません。パウロが気にかけていたのは、外部の人々から見たときに、クリスチャン共同体としての教会の存在意義がどのように映るかということでした。クリスチャンは、公の場で内輪の恥をさらすべきではありません(同6:6)。また、教会内部の問題を裁くために、世俗的な手段を用いるべきでもありません。ローマ世界では、裕福な人や政治的地位の高い人が法廷で優遇される傾向がありました。それとは逆に、クリスチャンはキリストに倣った裁きを行い、世俗的な基準とは一線を画さなければなりません。

【参考】英語テキストにある文

Think about Paul's catalog of vices in 1 Corinthians 5:10, 11 and 1 Corinthians 6:9, 10. Why does he list sexual sins along with other sins such as idolatry, thievery, greed, and extortion?

I コリント5:10、11、および6:9、10にパウロが挙げた悪徳のリストについて考えてみてください。なぜ彼は偶像崇拜、盗み、貪欲、恐喝といった他の罪と並んで性的な罪を挙げているのでしょうか。

28

I コリ 6:1～20 (新共同訳)

6:1 あなたがたの間で、一人が仲間の者と争いを起こしたとき、聖なる者たちに訴え出ないで、正しくない人々に訴え出るようなことを、なぜするのです。

6:2 あなたがたは知らないのですか。聖なる者たちが世を裁くのです。世があなたがたによって裁かれるはずなのに、あなたがたにはささいな事件すら裁く力がないのですか。

6:3 わたしたちが天使たちさえ裁く者だということを、知らないのですか。まして、日常の生活にかかわる事は言うまでもありません。

6:4 それなのに、あなたがたは、日常の生活にかかわる争いが起きると、教会では疎んじられている人たちを裁判官の席に

I コリ 6:1～20 (口語訳)

6:1 あなたがたの中のひとりが、仲間の者と何か争いを起した場合、それを聖徒に訴えないで、正しくない者に訴え出るようなことをするのか。

6:2 それとも、聖徒は世をさばくものであることを、あなたがたは知らないのか。そして、世があなたがたによってさばかれるべきであるのに、きわめて小さい事件でもさばく力がないのか。

6:3 あなたがたは知らないのか、わたしたちは御使をささばく者である。ましてこの世の事件などは、いうまでもないではないか。

6:4 それなのに、この世の事件が起ると、教会で軽んじられている人たちを、裁判の席につかせるのか。

着かせるのですか。

6:5 あなたがたを恥じ入らせるために、わたしは言っています。あなたがたの中には、兄弟を仲裁できるような知恵のある者が、一人もないのですか。

6:6 兄弟が兄弟を訴えるのですか。しかも信仰のない人々の前で。

6:7 そもそも、あなたがたの間に裁判ざたがあること自体、既にあなたがたの負けです。なぜ、むしろ不義を甘んじて受けないのです。なぜ、むしろ奪われるままでないのです。

6:8 それどころか、あなたがたは不義を行い、奪い取っています。しかも、兄弟たちに対してそうしている。

6:9 正しくない者が神の国を受け継がないことを、知らないのですか。思い違いをしてはいけません。みだらな者、偶像を礼拝する者、姦通する者、男娼、男色をする者、

6:10 泥棒、強欲な者、酒におぼれる者、人を悪く言う者、人の物を奪う者は、決して神の国を受け継ぐことができません。

6:11 あなたがたの中にはそのような者もいました。しかし、主イエス・キリストの名とわたしたちの神の霊によって洗われ、聖なる者とされ、義とされています。

6:12 「わたしには、すべてのことが許されている。」しかし、すべてのことが益になるわけではない。「わたしには、すべてのことが許されている。」しかし、わたしは何事にも支配されはしない。

6:13 食物は腹のため、腹は食物のためであるが、神はそれをいづれをも滅ぼされます。体はみだらな行いのためではなく、主のためにあり、主は体のためにおられるのです。

6:14 神は、主を復活させ、また、その力によってわたしたちをも復活させてくださいます。

6:15 あなたがたは、自分の体がキリストの体の一部だとは知らないのか。キリストの体の一部を娼婦の体の一部としてもよいのか。決してそうではない。

6:5 わたしがこう言うのは、あなたがたをはずかしめるためである。いったい、あなたがたの中には、兄弟の間の争いを仲裁することができるほどの知者は、ひとりもないのか。

6:6 しかるに、兄弟が兄弟を訴え、しかもそれを不信者の前に持ち出すのか。

6:7 そもそも、互に訴え合うこと自体が、すでにあなたがたの敗北なのだ。なぜ、むしろ不義を受けないのか。なぜ、むしろだまされていないのか。

6:8 しかるに、あなたがたは不義を働き、だまし取り、しかも兄弟に対してそうしているのである。

6:9 それとも、正しくない者が神の国をつぐことはないのを、知らないのか。まちがってはいけない。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、

6:10 貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者は、いずれも神の国をつぐことはないのである。

6:11 あなたがたの中には、以前はそんな人もいた。しかし、あなたがたは、主イエス・キリストの名によって、またわたしたちの神の霊によって、洗われ、きよめられ、義とされたのである。

6:12 すべてのことは、わたしに許されている。しかし、すべてのことが益になるわけではない。すべてのことは、わたしに許されている。しかし、わたしは何ものにも支配されることはない。

6:13 食物は腹のため、腹は食物のためである。しかし神は、それもこれも滅ぼすであろう。からだは不品行のためではなく、主のためであり、主はからだのためである。

6:14 そして、神は主をよみがえらせたが、その力で、わたしたちをもよみがえらせて下さるであろう。

6:15 あなたがたは自分のからだがキリストの肢体であることを、知らないのか。それなのに、キリストの肢体を取って遊女の肢体としてよいのか。断じていけない。

6:16 娼婦と交わる者はその女と一つの体となる、ということを知らないのですか。「二人は一体となる」と言われています。

6:17 しかし、主に結び付く者は主と一つの霊となるのです。

6:18 みだらな行いを避けなさい。人が犯す罪はすべて体の外にあります。しかし、みだらな行いをする者は、自分の体に対して罪を犯しているのです。

6:19 知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。

6:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。

I コリ 5:1~3、10~13 (新共同訳)

5:1 現に聞くとところによると、あなたがたの間にみだらな行いがあり、しかもそれは、異邦人の間にもないほどのみだらな行いで、ある人が父の妻をわがものとしているとのことです。

5:2 それにもかかわらず、あなたがたは高ぶっているのか。むしろ悲しんで、こんなことをする者を自分たちの間から除外すべきではなかったのですか。

5:3 わたしは体では離れていても霊ではそこにいて、現に居合わせた者のように、そんなことをした者を既に裁いています。

5:10 その意味は、この世のみだらな者とか強欲な者、また、人の物を奪う者や偶像を礼拝する者たちと一切つきあってはならない、ということではありません。もし、そうだとしたら、あなたがたは世の中から出て行かねばならないでしょう。

5:11 わたしが書いたのは、兄弟と呼ばれる人で、みだらな者、強欲な者、偶像を礼拝する者、人を悪く言う者、酒におぼれる者、人の物を奪う者がいれば、つきあうな、そのような人とは一緒に食事もするな、ということだったのです。

5:12 外部の人々を裁くことは、わたしの

6:16 それとも、遊女につく者はそれと一つのからだになることを、知らないのか。「ふたりの者は一体となるべきである」とあるからである。

6:17 しかし主につく者は、主と一つの霊になるのである。

6:18 不品行を避けなさい。人の犯すすべての罪は、からだの外にある。しかし不品行をする者は、自分のからだに対して罪を犯すのである。

6:19 あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。

6:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい。

I コリ 5:1~3、10~13 (口語訳)

5:1 現に聞くとところによると、あなたがたの間に不品行な者があり、しかもその不品行は、異邦人の間にもないほどのもので、ある人がその父の妻と一緒に住んでいるということである。

5:2 それなのに、なお、あなたがたは高ぶっている。むしろ、そんな行いをしている者が、あなたがたの中から除かれねばならないことを思って、悲しむべきではないか。

5:3 しかし、わたし自身としては、からだは離れていても、霊では一緒にいて、その場にいる者のように、そんな行いをした者を、すでにさばいてしまっている。

5:10 それは、この世の不品行な者、貪欲な者、略奪をする者、偶像礼拝をする者などと全然交際してはいけないと、言ったのではない。もしそうだとしたら、あなたがたはこの世から出て行かねばならないことになる。

5:11 しかし、わたしが実際に書いたのは、兄弟と呼ばれる人で、不品行な者、貪欲な者、偶像礼拝をする者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪をする者があれば、そんな人と交際してはいけない、食事を共にしてもいけない、ということであった。

5:12 外の人たちをさばくのは、わたしの

務めでしょうか。内部の人々をこそ、あなたがたは裁くべきではありませんか。

5:13 外部の人々は神がお裁きになります。「あなたがたの中から悪い者を除き去りなさい。」

ロマ 13:1～5 (新共同訳)

13:1 人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。

13:2 従って、権威に逆らう者は、神の定めにくぐることになり、背く者は自分の身に裁きを招くでしょう。

13:3 実際、支配者は、善を行う者にはそうではないが、悪を行う者には恐ろしい存在です。あなたは権威者を恐れないことを願っている。それなら、善を行いなさい。そうすれば、権威者からほめられるでしょう。

13:4 権威者は、あなたに善を行わせるために、神に仕える者なのです。しかし、もし悪を行えば、恐れなければなりません。権威者はいたずらに剣を帯びているのではなく、神に仕える者として、悪を行う者に怒りをもって報いるのです。

13:5 だから、怒りを逃れるためだけでなく、良心のためにも、これに従うべきです。

申 22:22～24 (新共同訳)

22:22 男が人妻と寝ているところを見つけたら、女と寝た男もその女も共に殺して、イスラエルの中から悪を取り除かねばならない。

22:23 ある男と婚約している処女の娘がいて、別の男が町で彼女と出会い、床を共にしたならば、

22:24 その二人を町の門に引き出し、石で打ち殺さねばならない。その娘は町の中で助けを求めず、男は隣人の妻を辱めたからである。あなたはこうして、あなたの中から悪を取り除かねばならない。

することであろうか。あなたがたのさばくべき者は、内の人たちではないか。外の人たちは、神がさばくのである。

5:13 その悪人を、あなたがたの中から除いてしまいなさい。

ロマ 13:1～5 (口語訳)

13:1 すべての人は、上に立つ権威に従うべきである。なぜなら、神によらない権威はなく、おおよそ存在している権威は、すべて神によって立てられたものだからである。

13:2 したがって、権威に逆らう者は、神の定めにくぐく者である。そむく者は、自分の身にさばきを招くことになる。

13:3 いったい、支配者たちは、善事をする者には恐怖でなく、悪事をする者にこそ恐怖である。あなたは権威を恐れないことを願うのか。それでは、善事をするがよい。そうすれば、彼からほめられるであろう。

13:4 彼は、あなたに益を与えるための神の僕なのである。しかし、もしあなたが悪事をするば、恐れなければならない。彼はいたずらに剣を帯びているのではない。彼は神の僕であって、悪事を行う者に対しては、怒りをもって報いるからである。

13:5 だから、ただ怒りをのがれるためだけでなく、良心のためにも従うべきである。

申 22:22～24 (口語訳)

22:22 もし夫のある女と寝ている男を見つけたら、その女と寝た男およびその女と一緒に殺し、こうしてイスラエルのうちから悪を除き去らなければならない。

22:23 もし処女である女が、人と婚約した後、他の男が町の中でその女に会い、これを犯したならば、

22:24 あなたがたはそのふたりを町の門にひき出して、石で打ち殺さなければならない。これはその女が町の内におりながら叫ばなかったからであり、またその男は隣人の妻をはずかしめたからである。あなたはこうしてあなたがたのうちから悪を除き去らなければならない。

問4 I コリント 4:1～8 を読んでください。この箇所は、聖化とみだらな行い(不品行)を避けることとの関係について、どんなことを教えていますか。

上記の箇所は、パウロが別の信徒たちに書き送った手紙の一部ですが、この原則はすべてのクリスチャンに当てはまります。

しかし、それでも疑問が残ります。コリントでは、何が起こっていたのでしょうか。なぜこのような多くの問題が生じたのでしょうか。

コリントには、福音によって自由になったのだから何をしても構わないと信じる人たちがいたようです。彼らは、腹が食物のために造られたように、体は性行為のために、そして性行為は体のためにつくられたのだと主張しました(I コリ 6:13)。パウロは、これはキリスト教的自由の誤った理解であると反論します。性的な事柄において誠実さを欠くことは、クリスチャンの存在意義と矛盾しており、福音によって人間に与えられた自由の誤用です(ロマ 8:2、ガラ 5:13)。私たちは罪から解放されたのであり、罪を犯すために「自由に」されたものではありません(ロマ 8:2、6:18、22)。実際、「体は……主のためにあり、主は体のためにおられるのです」〔口語訳「からだは……主のためであり、主はからだのためである」〕(I コリ 6:13)。私たちはキリストに属しており(同 6:15)、私たちが何者であるかということは、私たちの行いに影響を与えなければなりません。二つのことは密接に結びついています。I コリント 6 章では、このことが三つの異なる形で描かれています。

第一に、私たちは、「主イエス・キリストの名とわたしたちの神の霊によって洗われ、聖なる者とされ、義とされています」〔口語訳「主イエス・キリストの名によって、またわたしたちの神の霊によって、洗われ、きよめられ、義とされたのである」〕(I コリ 6:11)。I コリント 6:9、10 に挙げられている罪も、同 6:12～20 で非難されているみだらな行い(不品行)も、洗われ、聖なる者とされ(きよめられ)、義とされている人々の生活には、ふさわしくありません。

第二に、私たちはキリストの体の一部(口語訳:キリストの肢体)です(I コリ 6:15)。これは、私たちがキリストに結びつかなければならないことを意味します(同 6:17)。みだらな行い(不品行)は、その結びつきを壊すものです(同 6:13、15)。婚外性交において誰かと交わる者は、その人と「一体」(同 6:16)になります。聖霊によってキリストと結びつくことが、性的な事柄におけるクリスチャンの倫理を決定しなければなりません。

第三に、私たちの体は、「聖霊が宿ってくださる神殿」〔口語訳「聖霊の宮」〕(I コリ 6:19、20)です。性的な事柄において聖い生活を誠実に送る唯一の方法は、聖霊によってキリストと親密な関係を持つことです。パウロは、「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい」〔口語訳「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい」〕(ロマ 12:1)と述べています。

【参考】英語テキストにある文

Think about the wreckage that sexual sins have brought upon humanity. What should this tell us about how serious this issue should be for the Christian?

性的な罪が人類にもたらした惨状について考えてみてください。これは、クリスチャンにとってこの問題がどれほど深刻に受け取られるべきか、私たちに何を示しているでしょうか。

29

I テサ 4:1～8 （新共同訳）

4:1 さて、兄弟たち、主イエスに結ばれた者としてわたしたちは更に願い、また勧めます。あなたがたは、神に喜ばれるためにどのように歩むべきかを、わたしたちから学びました。そして、現にそのように歩んでいますが、どうか、その歩みを今後も更に続けてください。

4:2 わたしたちが主イエスによってどのように命令したか、あなたがたはよく知っているはずです。

4:3 実に、神の御心は、あなたがたが聖なる者となることです。すなわち、みだらな行いを避け、

4:4 おのおの汚れのない心と尊敬の念をもって妻と生活するように学ばねばならず、

4:5 神を知らない異邦人のように情欲におぼれてはならないのです。

4:6 このようなことで、兄弟を踏みつけたり、欺いたりしてはいけません。わたしたちが以前にも告げ、また厳しく戒めておいたように、主はこれらすべてのことについて罰をお与えになるからです。

4:7 神がわたしたちを招かれたのは、汚れた生き方ではなく、聖なる生活をさせるためです。

4:8 ですから、これらの警告を拒む者は、人を拒むのではなく、御自分の聖霊をあなたがたの内に与えてくださる神を拒むことになるのです。

I コリ 6:9～20 （新共同訳）

6:9 正しくない者が神の国を受け継がないことを、知らないのですか。思い違いをしてはいけません。みだらな者、偶像を礼拝する者、姦通する者、男娼、男色をする者、

I テサ 4:1～8 （口語訳）

4:1 最後に、兄弟たちよ。わたしたちは主イエスにあってあなたがたに願いかつ勧めます。あなたがたが、どのように歩いて神を喜ばすべきかをわたしたちから学んだように、また、いま歩いているとおりに、ますます歩き続けなさい。

4:2 わたしたちがどういう教を主イエスによって与えたか、あなたがたはよく知っている。

4:3 神のみこころは、あなたがたが清くなることである。すなわち、不品行を慎み、

4:4 各自、気をつけて自分のからだを清く尊く保ち、

4:5 神を知らない異邦人のように情欲をほしいまにせず、

4:6 また、このようなことで兄弟を踏みつけたり、だましたりしてはならない。前にもあなたがたにきびしく警告しておいたように、主はこれらすべてのことについて、報いをなさるからである。

4:7 神がわたしたちを召されたのは、汚れたことをするためではなく、清くなるためである。

4:8 こういうわけであるから、これらの警告を拒む者は、人を拒むのではなく、聖霊をあなたがたの心に賜わる神を拒むのである。

I コリ 6:9～20 （口語訳）

6:9 それとも、正しくない者が神の国をつぐことはないのを、知らないのか。まちがってはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、

6:10 泥棒、強欲な者、酒におぼれる者、人を悪く言う者、人の物を奪う者は、決して神の国を受け継ぐことができません。

6:11 あなたがたの中にはそのような者もいました。しかし、主イエス・キリストの名とわたしたちの神の霊によって洗われ、聖なる者とされ、義とされています。

6:12 「わたしには、すべてのことが許されている。」しかし、すべてのことが益になるわけではない。「わたしには、すべてのことが許されている。」しかし、わたしは何事にも支配されはしない。

6:13 食物は腹のため、腹は食物のためであるが、神はそのいずれをも滅ぼされます。体はみだらな行いのためではなく、主のためにあり、主は体のためにおられるのです。

6:14 神は、主を復活させ、また、その力によってわたしたちをも復活させてくださいます。

6:15 あなたがたは、自分の体がキリストの体の一部だとは知らないのか。キリストの体の一部を娼婦の体的一部分としてもよいのか。決してそうではない。

6:16 娼婦と交わる者はその女と一つの体となる、ということを知らないのですか。「二人は一体となる」と言われています。

6:17 しかし、主に結び付く者は主と一つの霊となるのです。

6:18 みだらな行いを避けなさい。人が犯す罪はすべて体の外にあります。しかし、みだらな行いをする者は、自分の体に対して罪を犯しているのです。

6:19 知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。

6:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。

ロマ 8:2 (新共同訳)

8:2 キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあ

6:10 貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者は、いずれも神の国をつぐこととはしないのである。

6:11 あなたがたの中には、以前はそんな人もいた。しかし、あなたがたは、主イエス・キリストの名によって、またわたしたちの神の霊によって、洗われ、きよめられ、義とされたのである。

6:12 すべてのことは、わたしに許されている。しかし、すべてのことが益になるわけではない。すべてのことは、わたしに許されている。しかし、わたしは何ものにも支配されることはない。

6:13 食物は腹のため、腹は食物のためである。しかし神は、それもこれも滅ぼすであろう。からだは不品行のためではなく、主のためであり、主はからだのためである。

6:14 そして、神は主をよみがえらせたが、その力で、わたしたちをもよみがえらせて下さるであろう。

6:15 あなたがたは自分のからだがキリストの肢体であることを、知らないのか。それなのに、キリストの肢体を取って遊女の肢体としてよいのか。断じていけない。

6:16 それとも、遊女につく者はそれと一つのからだになることを、知らないのか。「ふたりの者は一体となるべきである」とあるからである。

6:17 しかし主につく者は、主と一つの霊になるのである。

6:18 不品行を避けなさい。人の犯すすべての罪は、からだの外にある。しかし不品行をする者は、自分のからだに対して罪を犯すのである。

6:19 あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。

6:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい。

ロマ 8:2 (口語訳)

8:2 なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則か

なたを解放したからです。

ガラ 5:13 (新共同訳)

5:13 兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。

ロマ 6:18、22 (新共同訳)

6:18 罪から解放され、義に仕えるようになります。

6:22 あなたがたは、今は罪から解放されて神の奴隷となり、聖なる生活の実を結んでいます。行き着くところは、永遠の命です。

ロマ 12:1 (新共同訳)

12:1 こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。

らあなたを解放したからである。

ガラ 5:13 (口語訳)

5:13 兄弟たちよ。あなたがたが召されたのは、実に、自由を得るためである。ただ、その自由を、肉の働く機会としないで、愛をもって互に仕えなさい。

ロマ 6:18、22 (口語訳)

6:18 罪から解放され、義の僕となった。

6:22 しかし今や、あなたがたは罪から解放されて神に仕え、きよきに至る実を結んでいる。その終極は永遠のいのちである。

ロマ 12:1 (口語訳)

12:1 兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。

木曜日 7月23日 結婚と独身

私たちの体は、「聖霊が宿ってくださる神殿」〔口語訳「聖霊の宮」〕(Ⅰコリ 6:19)であるというパウロの主張は、みだらな行いを警告する文脈の中でなされています。聖霊の神殿(宮)となることこそ、聖い生活を送るための唯一の方法です。教会は周囲の環境から区別されるクリスチャン共同体です。それを可能にするのは、聖霊の存在です。

問5 I コリント 6:19～7:9 を読んでください。この箇所は、「みだらな行いを避けなさい」〔口語訳「不品行を避けなさい」〕(Ⅰコリ 6:18)という戒めをいかに実践できるかについて、どんなことを明らかにしていますか。

I コリント7章には、性に関する重要な教訓が含まれており、大まかに言えば、二つの部分、(1)結婚に関する教え(Ⅰコリ 7:1～24)と、(2)独身に関する教え(同 7:25～40)に分けることができます。I コリント7章は、性について語ることが重要かつ必要であることを理解するうえで役立ちます。

しかし、この章を読む際には、パウロがコリントの教会の問題に関連した具体的な質問に答えていることを忘れてはなりません。そうでなければ、パウロが結婚を軽視しているという印象を与えかねない記述もあります。しかし、実際はそうではありません(Ⅰテモ 4:1～3、5:14、ヘブ 13:4)。

注目すべきことに、「みだらな行いを避けなさい」〔口語訳「不品行を避けなさい」〕(Ⅰコリ 6:18)という命令は、キリストに結びつくこと(同 6:17)と、聖霊の神殿(宮)である(同 6:19)という考えの間に挟まれています。みだらな行い(不品行)を避けるために、これ以上の方法があるでしょうか。言うまでもなく、ありません。

また、神は性的交わりを創造されましたが、それは結婚生活の中でのみ楽しめるべきものです。性的交わりは、男と女の結婚生活における特権であり、それが聖書で認められている唯一の形です。

「みだらな行いを避けなさい」〔口語訳「不品行を避けなさい」〕と言ったとき、パウロはヨセフの物語(創 39:6～18)を思い浮かべていたのかもしれませんが。聖書には、ポティファルの妻の性的な誘惑を前に、ヨセフは「外へ逃げて行きました」〔口語訳「外にのがれました」〕(同 39:18)と記されています。このことは、創世記 39:6～18において、少なくとも4回言及されています。聖書は直接的には述べていませんが、ヨセフが結婚するまで性関係を控えていたことが暗示されています(同 41:45)。彼は聖霊に満たされた人であり(同 41:38)、神の目に正しいことを行いたいと願っていました。

性に関するゆがんだ考えから、私たちはいかに身を守ることができますか。

30

Ⅰコリ 6:19～20 (新共同訳)

6:19 知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。

6:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。

Ⅰコリ 7章 (新共同訳)

7:1 そちらから書いてよこしたことに ついて言えば、男は女に触れない方がよい。

7:2 しかし、みだらな行いを避けるために、男はめいめい自分の妻を持ち、また、女はめいめい自分の夫を持ちなさい。

7:3 夫は妻に、その務めを果たし、同様に妻も夫にその務めを果たしなさい。

7:4 妻は自分の体を意のままにする権利を持たず、夫がそれを持っています。同じように、夫も自分の体を意のままにする権利を持たず、妻がそれを持っているのです。

Ⅰコリ 6:19～20 (口語訳)

6:19 あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。

6:20 あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい。

Ⅰコリ 7章 (口語訳)

7:1 さて、あなたがたが書いてよこした事について答えると、男子は婦人にふれないがよい。

7:2 しかし、不品行に陥ることのないために、男子はそれぞれ自分の妻を持ち、婦人もそれぞれ自分の夫を持つがよい。

7:3 夫は妻にその分を果し、妻も同様に夫にその分を果すべきである。

7:4 妻は自分のからだを自由にすることはできない。それができるのは夫である。夫も同様に自分のからだを自由にすることはできない。それができるのは妻である。

7:5 互いに相手を拒んではいけません。ただ、納得しあったうえで、専ら祈りに時を過ごすためにしばらく別れ、また一緒にになるというなら話は別です。あなたが自分を抑制する力がないのに乗じて、サタンが誘惑しないともかぎらないからです。

7:6 もっとも、わたしは、そうしても差し支えないと言うのであって、そうしなさい、と命じるつもりはありません。

7:7 わたしとしては、皆がわたしのようになりてほしい。しかし、人はそれぞれ神から賜物をいただいているのですから、人によって生き方が違います。

7:8 未婚者とやもめに言いますが、皆わたしのようになりてほしい。しかし、自分を抑制できなければ結婚しなさい。情欲に身を焦がすよりは、結婚した方がましからです。

7:9 しかし、自分を抑制できなければ結婚しなさい。情欲に身を焦がすよりは、結婚した方がましからです。

7:10 更に、結婚者に命じます。妻は夫と別れてはいけません。こう命じるのは、わたしではなく、主です。

7:11——既に別れてしまったのなら、再婚せずにいるか、夫のもとに帰りなさい。——また、夫は妻を離縁してはいけません。

7:12 その他の人たちに対しては、主ではなくわたしが言うのですが、ある信者に信者でない妻がいて、その妻と一緒に生活が続けたいと思っている場合、彼女を離縁してはいけません。

7:13 また、ある女に信者でない夫がいて、その夫と一緒に生活が続けたいと思っている場合、彼を離縁してはいけません。

7:14 なぜなら、信者でない夫は、信者である妻のゆえに聖なる者とされ、信者でない妻は、信者である夫のゆえに聖なる者とされているからです。そうでなければ、あなたがたの子供たちは汚れていることになりますが、実際には聖なる者です。

7:15 しかし、信者でない相手が離れていくな、去るにまかせなさい。こうした場合に信者は、夫であろうと妻であろうと、結婚に縛られてはいけません。平和な生活を送るようにと、神はあなたがたを

7:5 互いに拒んではいけない。ただし、合意の上で祈りに専心するために、しばらく相別れ、それからまた一緒にになることは、さしつかえない。そうでないと、自制力のないのに乗じて、サタンがあなたがたを誘惑するかも知れない。

7:6 以上のことは、譲歩のつもりで言うのであって、命令するのではない。

7:7 わたしとしては、みんなの者がわたし自身のようになってほしい。しかし、ひとりひとり神からそれぞれの賜物をいただいている、ある人はこうしており、他の人はそうしている。

7:8 次に、未婚者たちとやもめたちと言いが、わたしのようになり、ひとりであれば、それがいちばんよい。

7:9 しかし、もし自制することができないなら、結婚するがよい。情の燃えるよりは、結婚する方が、よいからである。

7:10 更に、結婚している者たちに命じる。命じるのは、わたしではなく主であるが、妻は夫から別れてはいけません。

7:11 (しかし、万一別れているなら、結婚しないでいるか、それとも夫と和解するかしなさい)。また夫も妻と離婚してはならない。

7:12 そのほかの人々に言う。これを言うのは、主ではなく、わたしである。ある兄弟に不信者の妻があり、そして共にいることを喜んでいる場合には、離婚してはいけません。

7:13 また、ある婦人の夫が不信者であり、そして共にいることを喜んでいる場合には、離婚してはいけません。

7:14 なぜなら、不信者の夫は妻によってきよめられており、また、不信者の妻も夫によってきよめられているからである。もしそうでなければ、あなたがたの子は汚れていることになるが、実際はきよいではないか。

7:15 しかし、もし不信者の方が離れて行くのなら、離れるままにしておくがよい。兄弟も姉妹も、こうした場合には、束縛されてはいない。神は、あなたがたを平和に暮らせるために、召されたのである。

召されたのです。

7:16 妻よ、あなたは夫を救えるかどうか、どうして分かるのか。夫よ、あなたは妻を救えるかどうか、どうして分かるのか。

7:17 おのおの主から分け与えられた分に応じ、それぞれ神に召されたときの身分のままで歩みなさい。これは、すべての教会でわたしが命じていることです。

7:18 割礼を受けている者が召されたのなら、割礼の跡を無くそうとはいいけません。割礼を受けていない者が召されたのなら、割礼を受けようとはいいけません。

7:19 割礼の有無は問題ではなく、大切なのは神の掟を守ることです。

7:20 おのおの召されたときの身分にとどまっていなさい。

7:21 召されたときに奴隷であった人も、そのことを気にしてはいけません。自由の身になることができるとしても、むしろそのままいいなさい。

7:22 というのは、主によって召された奴隷は、主によって自由の身にされた者だからです。同様に、主によって召された自由な身分の者は、キリストの奴隷なのです。

7:23 あなたがたは、身代金を払って買い取られたのです。人の奴隷となつてはいけません。

7:24 兄弟たち、おのおの召されたときの身分のまま、神の前にとどまっていなさい。

7:25 未婚の人たちについて、わたしは主の指示を受けてはいませんが、主の憐れみにより信任を得ている者として、意見を述べます。

7:26 今危機が迫っている状態にあるので、こうするのがよいとわたしは考えます。つまり、人は現状にとどまっているのがよいのです。

7:27 妻と結ばれているなら、そのつながりを解こうとせず、妻と結ばれていないなら妻を求めてはいけません。

7:28 しかし、あなたが、結婚しても、罪を犯すわけではなく、未婚の女が結婚し

7:16 なぜなら、妻よ、あなたが夫を救いうるかどうか、どうしてわかるか。また、夫よ、あなたも妻を救いうるかどうか、どうしてわかるか。

7:17 ただ、各自は、主から賜った分に応じ、また神に召されたままの状態にしたがって、歩むべきである。これが、すべての教会に対してわたしの命じるところである。

7:18 召されたとき割礼を受けていたら、その跡をなくそうとしないがよい。また、召されたとき割礼を受けていなかったら、割礼を受けようとしなくてよい。

7:19 割礼があってもなくても、それは問題ではない。大事なのは、ただ神の戒めを守ることである。

7:20 各自は、召されたままの状態にとどまっているべきである。

7:21 召されたとき奴隷であっても、それを気にしないがよい。しかし、もし自由の身になりうるなら、むしろ自由になりなさい。

7:22 主にあつて召された奴隷は、主によって自由人とされた者であり、また、召された自由人はキリストの奴隷なのである。

7:23 あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。人の奴隷となつてはいけません。

7:24 兄弟たちよ。各自は、その召されたままの状態、神のみまえにいるべきである。

7:25 おとめのことについては、わたしは主の命令を受けてはいませんが、主のあわれみにより信任を受けている者として、意見を述べよう。

7:26 わたしはこう考える。現在迫っている危機のゆえに、人は現状にとどまっているがよい。

7:27 もし妻に結ばれているなら、解こうとするな。妻に結ばれていないなら、妻を迎えようとするな。

7:28 しかし、たとい結婚しても、罪を犯すのではない。また、おとめが結婚して

ても、罪を犯したわけではありません。ただ、結婚する人たちはその身に苦勞を負うことになるでしょう。わたしは、あなたがたにそのような苦勞をさせたくないのです。

7:29 兄弟たち、わたしはこう言いたい。定められた時は迫っています。今からは、妻のある人はない人のように、

7:30 泣く人は泣かない人のように、喜ぶ人は喜ばない人のように、物を買う人は持たない人のように、

7:31 世の事にかかわっている人は、かわりのない人のようにすべきです。この世の有様は過ぎ去るからです。

7:32 思い煩わないでほしい。独身の男は、どうすれば主に喜ばれるかと、主のことに心を遣いますが、

7:33 結婚している男は、どうすれば妻に喜ばれるかと、世の事に心を遣い、

7:34 心が二つに分かれてしまいます。独身の女や未婚の女は、体も霊も聖なる者になろうとして、主のことに心を遣いますが、結婚している女は、どうすれば夫に喜ばれるかと、世の事に心を遣います。

7:35 このようにわたしが言うのは、あなたがたのためのことをして、決してあなたがたを束縛するためではなく、品位のある生活をさせて、ひたすら主に仕えさせるためなのです。

7:36 もし、ある人が自分の相手である娘に対して、情熱が強くなり、その誓いにふさわしくないふるまいをしかねないと感じ、それ以上自分を抑制できないと思うなら、思いどおりにしなさい。罪を犯すことにはなりません。二人は結婚しなさい。

7:37 しかし、心にしっかりした信念を持ち、無理に思いを抑えつけたりせずに、相手の娘をそのままにしておこうと決心した人は、そうしたらよいでしょう。

7:38 要するに、相手の娘と結婚する人はそれで差し支えありませんが、結婚しないの方がもっとよいのです。

7:39 妻は夫が活着ている間は夫に結ばれていますが、夫が死ねば、望む人と再

も、罪を犯すのではない。ただ、それらの人々はその身に苦難を受けるであろう。わたしは、あなたがたを、それからのがれさせたいのだ。

7:29 兄弟たちよ。わたしの言うことを聞いてほしい。時は縮まっている。今からは妻のある者はないもののように、

7:30 泣く者は泣かないもののように、喜ぶ者は喜ばないもののように、買う者は持たないもののように、

7:31 世と交渉のある者は、それに深入りしないようにすべきである。なぜなら、この世の有様は過ぎ去るからである。

7:32 わたしはあなたがたが、思い煩わないようにしてほしい。未婚の男子は主のことに心をくばって、どうかして主を喜ばせようとするが、

7:33 結婚している男子はこの世のことに心をくばって、どうかして妻を喜ばせようとして、その心が分れるのである。

7:34 未婚の婦人とおとめとは、主のことに心をくばって、身も魂もきよくなろうとするが、結婚した婦人はこの世のことに心をくばって、どうかして夫を喜ばせようとする。

7:35 わたしがこう言うのは、あなたがたの利益になると思うからであって、あなたがたを束縛するためではない。そうではなく、正しい生活を送って、余念なく主に奉仕させたいからである。

7:36 もしある人が、相手のおとめに対して、情熱をいだくようになった場合、それは適当でないと思いつつも、やむを得なければ、望みどおりにしてもよい。それは罪を犯すことではない。ふたりは結婚するがよい。

7:37 しかし、彼が心の内で堅く決心していて、無理をしないで自分の思いを制することができ、その上で、相手のおとめをそのままにしておこうと、心の中で決めたなら、そうしてもよい。

7:38 だから、相手のおとめと結婚することはさしつかえないが、結婚しない方がもっとよい。

7:39 妻は夫が活着ている間は、その夫につながれている。夫が死ねば、望む人と

婚してもかまいません。ただし、相手は主に結ばれている者に限ります。

7:40 しかし、わたしの考えによれば、そのままでいる方がずっと幸福です。わたしも神の霊を受けていると思います。

I テモ 4:1~3 (新共同訳)

4:1 しかし、“霊”は次のように明確に告げておられます。終わりの時には、惑わす霊と、悪霊どもの教えとに心を奪われ、信仰から脱落する者がいます。

4:2 このことは、偽りを語る者たちの偽善によって引き起こされるのです。彼らは自分の良心に焼き印を押されており、

4:3 結婚を禁じたり、ある種の食物を断つことを命じたりします。しかし、この食物は、信仰を持ち、真理を認識した人たちが感謝して食べるようにと、神がお造りになったものです。

I テモ 5:14 (新共同訳)

5:14 だから、わたしが望むのは、若いやもめは再婚し、子供を産み、家事を取りしきり、反対者に悪口の機会を一切与えないことです。

ヘブ 13:4 (新共同訳)

13:4 結婚はすべての人に尊ばれるべきであり、夫婦の関係は汚してはなりません。神は、みだらな者や姦淫する者を裁かれるのです。

創 39:6~18 (新共同訳)

39:6 主人は全財産をヨセフの手にゆだねてしまい、自分が食べるもの以外は全く気を遣わなかった。ヨセフは顔も美しく、体つきも優れていた。

39:7 これらのことの後で、主人の妻はヨセフに目を注ぎながら言った。

「わたしの床に入りなさい。」

39:8 しかし、ヨセフは拒んで、主人の妻に言った。「ご存じのように、御主人はわたしを側に置き、家の中のことに一切気をお遣いになりません。財産もすべてわたしの手にゆだねてくださいました。

39:9 この家では、わたしの上に立つ者はいませんから、わたしの意のままにならないものもありません。ただ、あなたは別です。あなたは御主人の妻ですから。わたしは、どうしてそのように大きな悪を働いて、神に罪を犯すことができましよう。」

結婚してもさしつかえないが、それは主にある者に限る。

7:40 しかし、わたしの意見では、そのままでいたなら、もっと幸福である。わたしも神の霊を受けていると思う。

I テモ 4:1~3 (口語訳)

4:1 しかし、御霊は明らかに告げて言う。後の時になると、ある人々は、惑わす霊と悪霊の教とに気をとられて、信仰から離れ去るであろう。

4:2 それは、良心に焼き印をおされている偽り者の偽善のしわざである。

4:3 これらの偽り者どもは、結婚を禁じたり、食物を断つことを命じたりする。しかし食物は、信仰があり真理を認める者が、感謝して受けるようにと、神の造られたものである。

I テモ 5:14 (口語訳)

5:14 そういうわけだから、若いやもめは結婚して子を産み、家をおさめ、そして、反対者にそしられるすきを作らないようにしてほしい。

ヘブ 13:4 (口語訳)

13:4 すべての人は、結婚を重んずべきである。また寝床を汚してはならない。神は、不品行な者や姦淫をする者をさばかれる。

創 39:6~18 (口語訳)

39:6 そこで彼は持ち物をみなヨセフの手にゆだねて、自分が食べる物のほかは、何をも顧みなかった。

さてヨセフは姿がよく、顔が美しかった。

39:7 これらの事後、主人の妻はヨセフに目をつけて言った、「わたしと寝なさい」。

39:8 ヨセフは拒んで、主人の妻に言った、「御主人はわたしがいるので家の中の何をも顧みず、その持ち物をみなわたしの手にゆだねられました」。

39:9 この家にはわたしよりも大いなる者はありません。また御主人はあなたを除いては、何をわたしに禁じられませんでした。あなたが御主人の妻であるからです。どうしてわたしはこの大きな悪をおこなって、神に罪を犯すことができましょう」。

39:10 彼女は毎日ヨセフに言い寄ったが、ヨセフは耳を貸さず、彼女の傍らに寝ることも、共にいることもしなかった。

39:11 こうして、ある日、ヨセフが仕事をしようと家に入ると、家の者が一人も家の中にいなかったの、

39:12 彼女はヨセフの着物をつかんで言った。「わたしの床に入りなさい。」ヨセフは着物を彼女の手に残し、逃げて外へ出た。

39:13 着物を彼女の手に残したまま、ヨセフが外へ逃げたのを見ると、

39:14 彼女は家の者たちを呼び寄せて言った。「見てごらん。ヘブライ人などをわたしたちの所に連れて来たから、わたしたちはいたずらをされる。彼がわたしの所に来て、わたしと寝ようとしたから、大声で叫びました。」

39:15 わたしが大声をあげて叫んだのを聞いて、わたしの傍らに着物を残したまま外へ逃げて行きました。」

39:16 彼女は、主人が家に帰って来るまで、その着物を傍らに置いていた。

39:17 そして、主人に同じことを語った。「あなたがわたしたちの所に連れて来た、あのヘブライ人の奴隷はわたしの所に来て、いたずらをしようとしたのです。」

39:18 わたしが大声をあげて叫んだものですから、着物をわたしの傍らに残したまま、外へ逃げて行きました。」

創 41:38、45 (新共同訳)

41:38 ファラオは家来たちに、「このように神の霊が宿っている人はほかにあるだろうか」と言い、

41:45 ファラオは更に、ヨセフにツァフェナト・パネアという名を与え、オンの祭司ポティ・フェラの娘アセナトを妻として与えた。ヨセフの威光はこうして、エジプトの国にあまねく及んだ。

39:10 彼女は毎日ヨセフに言い寄ったけれども、ヨセフは聞きいれず、彼女と寝なかった。また共にいなかった。

39:11 ある日ヨセフが務をするために家にはいった時、家の者がひとりもそこにいなかったの、

39:12 彼女はヨセフの着物を捕えて、「わたしと寝なさい」と言った。ヨセフは着物を彼女の手に残して外にのがれ出た。

39:13 彼女はヨセフが着物を自分の手に残して外にのがれたのを見て、

39:14 その家の者どもを呼び、彼らに告げて言った、「主人がわたしたちの所に連れてきたヘブルびとは、わたしたちに戯れます。彼はわたしと寝ようとして、わたしの所にはいったので、わたしは大声で叫びました。」

39:15 彼はわたしが声をあげて叫ぶのを聞くと、着物をわたしの所に残して外にのがれ出ました。」

39:16 彼女は、その着物をかたわらに置いて、主人の帰って来るのを待った。

39:17 そして彼女は次のように主人に告げた、「あなたがわたしたちに連れてこられたヘブルのしもべはわたしに戯れようとして、わたしの所にはいつてきました。」

39:18 わたしが声をあげて叫んだので、彼は着物をわたしの所に残して外にのがれました。」

創 41:38、45 (口語訳)

41:38 そこでパロは家来たちに言った、「われわれは神の霊をもつこのような人を、ほかに見いだし得ようか」。

41:45 パロはヨセフの名をザフナテ・パネアと呼び、オンの祭司ポテペラの娘アセナテを妻として彼に与えた。ヨセフはエジプトの国を巡った。

金曜日 7月24日 さらなる研究

『患難から栄光へ』第29章「共に悩み、共に喜ぶ」を読んでください。

興味深いことに、I コリント 5:10、11と同 6:9、10の悪徳のリストでは、偶像を礼拝する者や酒におぼれる者が、性的に不道德な者と並んで挙げられています。

パウロがⅠコリント10:7(出32:1~6と比較)で回想しているように、偶像礼拝の祭りは、しばしば過度の飲食を伴い、それがみだらな行いへの扉を開きました(Ⅰコリ10:8)。エレン・ホワイトは、こう述べています。

「利己的で貪欲なうちは、だれも清めの祝福にあずかることはできません。……人体に備わった、悪習に対する抵抗力はすばらしいものですが、過度の飲食という悪習慣がいつまでも続くと、人体のあらゆる機能が弱くなります。神を信じると言うクリスチャンでさえ、ゆがんだ食欲と情欲を満たすことによって、自らの素質を弱め、身体的、知的、道徳的能力を低下させてしまいます」(『清められた生活』23、24 ページ)。

「人が完全に自己を空にし、あらゆる偽りの神を魂から追い出したとき、その空所はキリストの霊の流入によって満たされる。そのような人は、愛によって働き、あらゆる道徳的、霊的な汚れから魂を清める信仰を持つ」(『家庭の宣教師』1893年11月号、英文)。

【参考】 — Ellen G. White, The Home Missionary, November 1893.

“When one is fully emptied of self, when every false god is cast out of the soul, the vacuum is supplied by the inflowing of the Spirit of Christ. Such a one has the faith which works by love and purifies the soul from every moral and spiritual defilement.”

「神は、ご自分の高く清らかな天の基準にまで私たちを高めようと努めておられる。なぜならこの目的のために、神の霊は絶えず私たちと共に戦っておられからだ。……私たちの生来の傾向は、神の聖霊によって矯正されない限り、道徳的な死の種を宿しているのである」(『原稿12』1888年、英文)。

【参考】 — Ellen G. White, Manuscript 12, 1888.

“God is seeking to exalt us to His high, pure, heavenly standard. For this purpose His Spirit is constantly striving with us. . . . Our natural tendencies, unless corrected by the Holy Spirit of God, have in them the seeds of moral death.”

話し合いのための質問

- ① コリントの多くの信者は、社会的承認を得たいという願望を明らかに抱いていました。なぜそれがクリスチャンの存在意義にとって危険なのでしょう。私たちは同じ過ちを犯さないために、どんなことができますか。
- ② 「あなたがたは知らないのですか。自分の体が聖霊の宮であることを」というパウロの修辭的な問いはどれも(Ⅰコリ5:6、6:2、3、9、15、16、19)、「もちろん知っています」という、力強い肯定の答えを求めています。このことは、コリントの教会に対するパウロの懸念を理解するうえで、いかに役立つのでしょうか。なぜ私たちも今日、これらの問題に関心を持つべきなのでしょう。

- ③ 結婚は神からもたらされたものであり(創 1:27、28、2:18~24)、尊ばれなければなりません(ヘブ 13:4)。多くの人が結婚を時代遅れだと考える時代に、私たちはいかにして、結婚が本当に神からの賜物であり、エデンの園において与えられたものであることを、この世に示せるでしょうか。

31

I コリ 5:10、11 (新共同訳)

5:10 その意味は、この世のみだらな者とか強欲な者、また、人の物を奪う者や偶像を礼拝する者たちと一切つきあってはならない、ということではありません。もし、そうだとしたら、あなたがたは世の中から出て行かねばならないでしょう。

5:11 わたしが書いたのは、兄弟と呼ばれる人で、みだらな者、強欲な者、偶像を礼拝する者、人を悪く言う者、酒におぼれる者、人の物を奪う者がいれば、つきあうな、そのような人とは一緒に食事するな、ということだったのです。

I コリ 6:9、10 (新共同訳)

6:9 正しくない者が神の国を受け継げないことを、知らないのですか。思い違いをしてはいけません。みだらな者、偶像を礼拝する者、姦通する者、男娼、男色をする者、

6:10 泥棒、強欲な者、酒におぼれる者、人を悪く言う者、人の物を奪う者は、決して神の国を受け継ぐことができません。

I コリ 10:7、8 (新共同訳)

10:7 彼らの中のある者がしたように、偶像を礼拝してはいけません。「民は座って飲み食いし、立って踊り狂った」と書いてあります。

10:8 彼らの中のある者がしたように、みだらなことをしないようにしましょう。みだらなことをした者は、一日で二万三千人倒れて死にました。

出 32:1~6 (新共同訳)

32:1 モーセが山からなかなか下りて来ないのを見て、民がアロンのもとに集まって来て、「さあ、我々に先立って進む神々を造ってください。エジプトの国から我々を導き上った人、あのモーセがど

I コリ 5:10、11 (口語訳)

5:10 それは、この世の不品行な者、貪欲な者、略奪をする者、偶像礼拝をする者などと全然交際してはいけなくて、言ったのではない。もしそうだとしたら、あなたがたはこの世から出て行かねばならないことになる。

5:11 しかし、わたしが実際に書いたのは、兄弟と呼ばれる人で、不品行な者、貪欲な者、偶像礼拝をする者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪をする者があれば、そんな人と交際をしてはいけなくて、食事を共にしてもいけない、ということであった。

I コリ 6:9、10 (口語訳)

6:9 それとも、正しくない者が神の国をつぐことはないのを、知らないのか。まちがってはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、

6:10 貪欲な者、酒に酔う者、そしめる者、略奪する者は、いずれも神の国をつぐことはないのである。

I コリ 10:7、8 (口語訳)

10:7 だから、彼らの中のある者たちのように、偶像礼拝者になってはならない。すなわち、「民は座して飲み食いをし、また立って踊り戯れた」と書いてある。10:8 また、ある者たちがしたように、わたしたちは不品行をしてはならない。不品行をしたため倒された者が、一日に二万三千人もあった。

出 32:1~6 (口語訳)

32:1 民はモーセが山を下ることのおそいを見て、アロンのもとに集まって彼に言った、「さあ、わたしたちに先立って行く神を、わたしたちのために造ってください。わたしたちをエジプトの国が

うなってしまったのか分からないからです」と言う、

32:2 アロンは彼らに言った。「あなたたちの妻、息子、娘らが着けている金の耳輪をはずし、わたしのところに持って来なさい。」

32:3 民は全員、着けていた金の耳輪をはずし、アロンのところに持って来た。

32:4 彼はそれを受け取ると、のみで型を作り、若い雄牛の鑄像を造った。すると彼らは、「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上ったあなたの神々だ」と言った。

32:5 アロンはこれを見て、その前に祭壇を築き、「明日、主の祭りを行う」と宣言した。

32:6 彼らは次の朝早く起き、焼き尽くす献げ物をささげ、和解の献げ物を供えた。民は座って飲み食いし、立っては戯れた。

I コリ 5:6 (新共同訳)

5:6 あなたがたが誇っているのは、よくない。わずかなパン種が練り粉全体を膨らませることを、知らないのですか。

I コリ 6:2、3、9、15、16、19 (新共同訳)

6:2 あなたがたは知らないのですか。聖なる者たちが世を裁くのです。世があなたがたによって裁かれるはずなのに、あなたがたにはささいな事件すら裁く力がないのですか。

6:3 わたしたちが天使たちさえ裁く者だということを、知らないのですか。まして、日常生活にかかわる事は言うまでもありません。

6:9 正しくない者が神の国を受け継がないことを、知らないのですか。思い違いをしてはいけない。みだらな者、偶像を礼拝する者、姦通する者、男娼、男色をする者、

6:15 あなたがたは、自分の体がキリストの体の一部だとは知らないのか。キリストの体の一部を娼婦の体的一部分としてもよいのか。決してそうではない。

6:16 娼婦と交わる者はその女と一つの体となる、ということを知らないのですか。「二人は一体となる」と言われています。

ら導きのぼった人、あのモーセはどうなったのか分からないからです」。

32:2 アロンは彼らに言った、「あなたがたの妻、むすこ、娘らの金の耳輪をはずしてわたしに持ってきなさい」。

32:3 そこで民は皆その金の耳輪をはずしてアロンのもとに持ってきた。

32:4 アロンがこれらを彼らの手から受け取り、工具で型を造り、鑄て子牛としたので、彼らは言った、「イスラエルよ、これはあなたをエジプトの国から導きのぼったあなたの神である」。

32:5 アロンはこれを見て、その前に祭壇を築いた。そしてアロンは布告して言った、「あすは主の祭である」。

32:6 そこで人々はあくる朝早く起きて燔祭をささげ、酬恩祭を供えた。民は座して食い飲みし、立っては戯れた。

I コリ 5:6 (口語訳)

5:6 あなたがたが誇っているのは、よろしくない。あなたがたは、少しのパン種が粉のかたまり全体をふくらませることを、知らないのか。

I コリ 6:2、3、9、15、16、19 (口語訳)

6:2 それとも、聖徒は世をさばくものであることを、あなたがたは知らないのか。そして、世があなたがたによってさばかれるべきであるのに、きわめて小さい事件でもさばく力がないのか。

6:3 あなたがたは知らないのか、わたしたちは御使をささばく者である。ましてこの世の事件などは、いうまでもないではないか。

6:9 それとも、正しくない者が神の国をつぐことはないのを、知らないのか。まちがってはいけない。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、

6:15 あなたがたは自分のからだをキリストの肢体であることを、知らないのか。それなのに、キリストの肢体を取って遊女の肢体としてよいのか。断じていけない。

6:16 それとも、遊女につく者はそれと一つのからだになることを、知らないのか。「ふたりの者は一体となるべきである」とあるからである。

6:19 知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。

創 1:27、28 (新共同訳)

1:27 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。

1:28 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

創 2:18～24 (新共同訳)

2:18 主なる神は言われた。

「人が独りであるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」

2:19 主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。

2:20 人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった。

2:21 主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。

2:22 そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、

2:23 人は言った。「ついに、これこそわたしの骨の骨/わたしの肉の肉。これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう/まさに、男（イシュ）から取られたものだから。」

2:24 こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。

ヘブ 13:4 (新共同訳)

13:4 結婚はすべての人に尊ばれるべきであり、夫婦の関係は汚してはなりません。神は、みだらな者や姦淫する者を裁かれるのです。

6:19 あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。

創 1:27、28 (口語訳)

1:27 神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。

1:28 神は彼らを祝福して言われた、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」。 2

創 2:18～24 (口語訳)

2:18 また主なる神は言われた、「人がひとりであるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう」。

2:19 そして主なる神は野のすべての獣と、空のすべての鳥とを土で造り、人のところへ連れてきて、彼がそれにどんな名をつけるかを見られた。人がすべて生き物に与える名は、その名となるのであった。

2:20 それで人は、すべての家畜と、空の鳥と、野のすべての獣とに名をつけたが、人にはふさわしい助け手が見つからなかった。

2:21 そこで主なる神は人を深く眠らせ、眠った時に、そのあばら骨の一つを取って、その所を肉でふさがれた。

2:22 主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこられた。

2:23 そのとき、人は言った。「これこそ、ついにわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。男から取ったものだから、これを女と名づけよう」。

2:24 それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。

ヘブ 13:4 (口語訳)

13:4 すべての人は、結婚を重んずべきである。また寝床を汚してはならない。神は、不品行な者や姦淫をする者をさばかれる。

【参考】副読本にある《概要》を転載します。

コリントの信徒への手紙Ⅰ（コリント人への第一の手紙）において、パウロはクリスチャンにとって聖なる性質の重要な役割を強調し、それを性的純潔と結びつけています。コリントの教会員は、聖徒として召されていると信じながらも性的不道德にふけり、信仰と実践の間で不調和な状態に生きていました。パウロは旧訳聖書を引用し、一人の男と一人の女の結婚こそが、人類に対する神の計画に従って性が営まれるべき場所であることを強調しています。この文脈で使徒は、教会が周囲の文化から区別され、性的行為だけでなく他の生活面においても、クリスチャン共同体としてのアイデンティティを維持していく教会の重要性を強調しており、世に対する教会の証しを損なうことがないよう強調しています。このメッセージは、コリントの教会にとってもそうであったように、今日においても同様に重要です。